

【今週の注目疾患】

【劇症型溶血性レンサ球菌感染症】

劇症型溶血性レンサ球菌感染症は、主にA群レンサ球菌の *Streptococcus pyogenes* によって引き起こされる敗血症性ショック病態である。初期症状は四肢の疼痛、腫脹、発熱、血圧低下等であるが、あきらかな前駆症状がないこともある。症状の進行が非常に急激で、発症すると急速に多臓器不全となり、死に至ることも多い。*S. pyogenes* 以外にもB群レンサ球菌の *S. agalactiae* やG群(C群、A群である場合もある)の *S. dysgalactiae* subsp. *equisimilis* などが起因菌になる。感染症法において、劇症型溶血性レンサ球菌感染症は5類全数報告対象疾患に分類され、「ショック症状」かつ「肝不全、腎不全、急性呼吸器窮迫症候群、DIC、軟部組織炎、全身性紅斑性発疹、中枢神経症状のうち2つ以上」を伴い、 β 溶血性レンサ球菌が血液、髄液などの通常無菌的な部位、もしくは生検組織、手術創、壊死軟部組織といった箇所から検出された症例について、届出対象となる。

2013～2017年第24週までに、合計67例が県内の保健所に届け出られており、2017年は9例の届出がある。発生に季節的な変動はみられないが、報告は増加傾向にある(図1)。性別については男性患者が33例(49%)と性別による届出の差はない。分離株においてA群とされたのが37例(55%)、次いでG群が17例(25%)、B群が8例(12%)、残る5例は血清群別未実施であった。患者の年齢中央値は68.5歳(範囲0～94歳)であり高齢者に多いが(図2)、G群による症例の年齢中央値(77歳)の方が、A群(66歳)よりも高い。血清群の違いによる発症年齢の違いは、宿主因子(免疫状態など)や病原体因子(侵入門戸など)が複雑に影響していると考えられる。

劇症型溶血性レンサ球菌感染症は、その原因となる菌種が複数あり、包括的な予防手段といったことは困難であるが、B群レンサ球菌の垂直感染による新生児の侵襲性感染症の予防には、妊娠35-37週において母親の膣内・直腸内の保菌の有無を調べ、陽性時には分娩時に母親へ抗菌薬の投与が行われることもある。また、その他のレンサ球菌(例えば *S. suis*) による劇症型の侵襲性感染症についても起きうることに注意が必要である。

図1:2013～2017年第24週に県内の保健所に届出られた劇症型溶血性レンサ球菌感染症の
診断年・月別推移;血清群別(群不明の5例を除く)

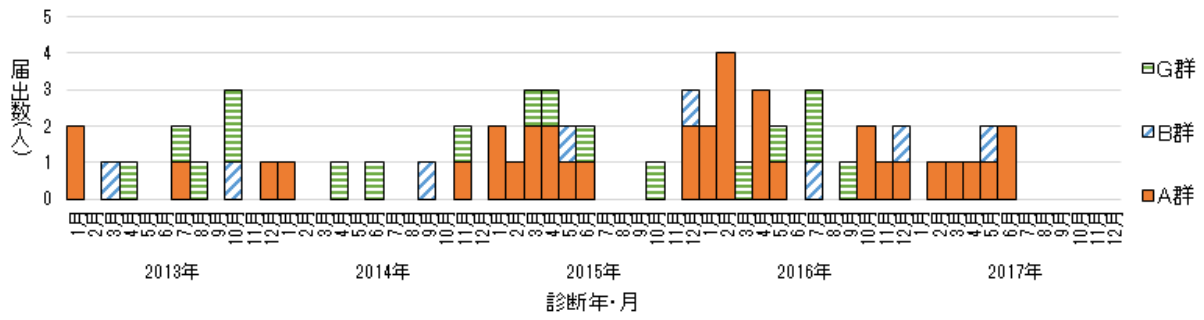


図2:2013～2017年第24週に県内保健所に届出られた劇症型溶血性レンサ球菌感染症の患者年齢分布;血清群別
(群不明の5例を除く)

